学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.42 2010年7月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2010年7月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

Mail Seminar

感情の論理 vol.41「当たり前のことを当たり前に」

先々月、先月に続いて、３部作の最終編です。先月まで指摘してきたことは、塾という存在の本質である学習指導とは関係のない話です。しかし、そうした周辺部分に配慮できない塾は、「塾というビジネス」を営む資格はありません。遠からず市場から見放されることでしょう。

「客商売」という言葉がありますが、客のいない商売などこの世に存在しません。客がなくても成立するのはアマチュア（趣味）の世界です。草野球は観客がいなくても成立しますが、プロ野球は違います。それは、どんなビジネスでも同じです。

塾だって客商売です。ならば、客の立場、感情…そうしたものに思いを馳せ、配慮するのがプロというものです。それが「客を幸せにすること」であり、我々はそのことによって対価を頂戴して自らの幸せを実現しているのですから。

その関係がｗｉｎ－ｗｉｎであり、私が主張しているフレンドシップ・マーケティングの本質です。誰かの不幸や不利益を前提とするのは「詐欺」という犯罪です。中小・個人塾の経営者は、ややもすると自己都合で物事を考え、行動しがちです。私が直面した担当者の○○さんもそうです。客の存在を忘れてビジネスは成立しないことを胆に命じましょう。

娘のバイト先（ドトール・コーヒー）に週３回、迎えに行くようになって気付いたことがあります。コーヒーショップのドトールは、スタッフ全員が閉店後、毎日 90 分掛けて掃除をしています。我が家で年に１度するかどうか…というレベルのことを毎日しているのです。それで思い出したことがあります。

若い頃、町の喫茶店で夕食に名古屋名物「味噌カツ定食」を注文し、食べていた時のことです。閉店時間が近かったこともあって、バイトの?お姉さんが客のいないスペースから掃除を始めたのです。食事をしている私としては、ホコリが気になってしまいます。今と違って、文句を言うことはありませんでしたが、私は二度と、その店に行くことはなくなりました。

以前は、資本力の差が大きすぎて町の喫茶店が潰れていくのは仕方がないと思っていました。しかし、ドトールの掃除風景を見、日々の様子を娘から聞くに付け、街の喫茶店が消滅していく理由は別のところにあるのではないか…そう思い始めているのです。

ということは、もし、中小・個人塾が潰れるとしたら、それは近くに大手塾が進出したのが原因ではなく…そう、全ての原因は外部にあるのではなく、内部にあるのです。当たり前のことを当たり前に実行する。その重要さを再度、認識して下さい。

一般社会は朝の９時から動き始めるのが当たり前。客が来たら、お茶を出すのが当たり前。何かをしてもらったら、「ありがとう」を言うのが当たり前。客を招く場所の美化に努めるのが当たり前…。

以前に実際にあった、とある個人塾の経営者との会話です。

私「ちゃんと教室は掃除していますか?」

経営者「はい、毎週土曜日は掃除の日と決めています。」

…客商売で、店の掃除を週１回しかしない業界って他にあるのでしょうか。小学校ですら、生徒達は毎日、教室を掃除していますよね。

あなたの塾は当たり前のことが出来ていますか?

全国学習塾援護会 森 智勝

学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.42 2010年7月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2010年7月21日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

業界TOPICS

vol.16 「どうしたら教育の進化に対応できるのか？」

その一「英語学習の新しい時代」

2002年教育改革で大幅に減らされた学習内容が、今学校現場に復活してきており、総合学習の時間を使ったり、先取り学習をした上で追加の学習内容を指導したり･･･各学校で現行のカリキュラムに追加した学習内容が盛り込
まれつつあります。

それでも、総合学習の中で行われた小学生の英語学習は概ね好評なので、各学校で存続していく傾向にあり、外国人講師と教育委員会が契約して、今後も定期的に指導が行われる模様です。親の意識も変化し、たとえば英語塾や総合塾の中の英語コースに通うケースも増えているようです。

不況で失業率が高く、小さな子どもを塾通いさせるのは不安だという親にとって、インターネットを活用した英語の双方向ライブ指導は、まさに朗報です。米国には英語指導の専門資格を持つ多数の教師を抱える都市もあり、地域活性化の一環として、日本の子どもたちの英語指導をネット活用したシステムを使い、格安で行っています。同様のことが携帯端末でも可能となりつつあり、将来的には「携帯端末で学習して語学や専門資格を取得」できる時代が到来するかもしれません。

その二「映像教材の劇的進化」

塾・予備校の高校部の指導ツールにおいて、全体の六割から七割はデジタル技術を活用した映像教材が使われています。ライブ指導していたベテラン講師が教室からすがたを消し、それに代わって、最新設備のスタジオで録画した「映像授業」が全国の教室に配信されるのです。

担任やアシスタントが、生徒の学習内容や進路についての相談を受け持ち、生徒のモチベーションアップや弱点補強、夢の実現に向けての受験相談などに対応します。

過去五年間をベースに将来的な予測をすれば、おそらく数年後には八割から九割の生徒が何らかの形で映像教材を活用して大学受験をするようになり、同時に、それに続く中学生や小学生たちも映像教材を徐々に活用していくようになると思われます。

映像教材は、日進月歩で進化するデジタル技術により、さらなる教育環境の劇的進化を約束しています。鮮明でスピードの速い映像が端末に配信され、学校、塾、家庭、個人の端末と、場所と時間を選ばないで学習できる画期的な教育ツールとして期待されています。

その三「ネット環境の進化で塾経営も生徒指導も変わる」

ＩＤとパスワードでWEB上の個人ルームに入り、当日の模試の成績や順位、各科目の評価などを自宅で確認できる格安のシステムが、意識の高い地域一番塾に採用されつつあります。これにより、どの生徒の親がどれだけアクセスしているかが一覧表で日々確認することができ、アクセスの多い意識の高い親とアクセスの少ない親へのアプローチの仕方を校長が担任に的確に指示することが可能となります。

塾の経営においても、紙ベースで生徒・父母アンケートや校舎からの数値的な報告を集めていたものが、全てネット上で処理され、その日のうちに情報を全社員が共有するという時代に変わりました。これが今やスタンダートとして受け入れられているかどうかが、塾の生き残りの前提条件ともなっています。

また、生徒指導においても、日々情報の共有化を行うことで、「仕事の標準化」が成され、「誰でもいつでも、どんな生徒に対しても同じように質の高い対応が可能」となっています。ベテランの経験則に頼ってきた塾も、今後はアルバイト学生や新卒社員であっても、即戦力として生徒対応ができる時代に入ったのです。

全国の主要塾と地域一番塾においては、以上のような内容が可能となる最新のシステムの導入が行われており、基本的なものが実現したあとは、それぞれの塾で独自の応用的な活用が始まっています。デジタル技術の進化とともに、塾の経営や指導も進化していく時代なのです。

人間関係に学ぶ。
第四回「秀吉と利休」

「一期一会」

茶の湯と生花は乱世の時代に、上層階級のサロンで「もてなし」として栄えました。どちらも「もてなし」のあとに何も残さないものであり、だからこそ「一瞬にして消えてしまうものを惜しむ」華やかさで、「一期一会」の具現化として、武士や知識階級にもてはやされたのです。

足軽から関白まで登り詰めた秀吉にとって、茶の湯とは権勢を欲しいがままにする人間を象徴する「遊び」でした。しかし、その「遊び」の大家、利休が自分の思いのままにならぬ存在であるとわかったのも、「茶の湯」という「もてなし」がきっかけでした・・・その場だけで消えて無くなる「一期一会」の茶の湯によって、皮肉にも秀吉は利休の中に「消えない傲慢さ」を見たのでした。

そして、利休の権威が誰にも超えられないものであると理解した時、秀吉に殺意が芽生えました。あれほど・・・他人の入る隙のないほどの信頼関係を築いた二人なのに、今度は誰にも近寄り難い冷えた関係に陥ってしまったのです。

権力の最上位にいた秀吉は、利休に対して狂おしいほどの「嫉妬」をしてしまったのかもしれません・・・。

「〝黄金の都〟京都」

秀吉ほど、人間一人の生涯の重さを実感していた人は居なかったのではないでしょうか。だからこそ、彼は黄金と権力に対する人一倍のこだわりがあったのです。

全国平定による金山・銀山の獲得や検地による石高制の確立、そして南蛮貿易の掌握など全てが黄金の都『京都』で権力を誇示することが目的でした。

華やかなパフォーマンスに欠かせなかったのが、千利休の確立した茶の湯であり、大茶会や有力者との侘茶会などで、お互いの茶器を自慢し合ったのです。「北野の大茶会」を茶頭として企画・実行したのも千利休でした。

黄金の茶室、黄金の瓦としゃちほこ、金箔の仏像・・・黄金は秀吉を象徴するものとして絶対的な存在を示しました。しかし、彼の権勢も日本国内だけのものでした。明を征服しようとして朝鮮半島に出兵してはじめて、秀吉は日本以外の、世界というものの広さを実感し、夢半ばにして病没したのでした。それは、千利休が秀吉から怒りを買って自刃した七年後のことでした・・・大茶会は開催できず、秀吉は『醍醐の花見』で現世最期の夢を見たのでした。

大阪城

◆ 豊臣秀吉（とよとみ・ひでよし　1537～1598）◆

戦国時代から安土桃山時代の武将。日吉丸から藤吉郎と名を変え、十五歳で松下之綱の下男、後に織田信長に仕え、やがて数々の武勲をあげ羽柴秀吉と名乗り、本能寺の変で信長が謀殺されたあと、いち早く明智光秀を滅ぼして信長後の主導権を握り、四国・北国・九州・奥羽を平定して天下統一を達成。この間、大坂城を築城し、関白の位を得て、豊臣姓を賜り、太政大臣、1591 年には太閤と称するようになる。大国明（みん）を征服しようとして朝鮮に出兵（文禄・慶長の役）したが、その野望半ばで病没。

◆ 千利休（せんの・りきゅう　1522～1591）◆

安土桃山時代の茶人。日本の茶道を大成した人物。当時の国際都市堺に暮らし、貿易も商いとして、宗易と号した。武野紹鷗（たけの・じょうおう）に学び侘茶（わびちゃ）を完成、織田信長・豊臣秀吉に仕えて寵愛を受けたが、晩年に秀吉の怒りを買い自刃。その原因とされた「千利休像」は、京都の大徳寺に今もひっそりと保管されていると言われる。

◆ 茶道（さどう）◆

湯を沸かし、茶を点て、茶を振る舞う行為。またそれを基本とした様式と芸道。元来「茶湯」「茶の湯」といった。千利休は「数寄道」という語も使っていたが、江戸時代初期には茶道と呼ばれた（『茶話指月集』『南方録』など）。

主客の一体感を旨とし、茶碗に始まる茶道具や茶室の床の間にかける禅語などの掛け物は個々の美術品である以上に全体を構成する要素として一体となり、茶事として進行するその時間自体が総合芸術とされる。

現在一般に、茶道といえば抹茶を用いる茶道のことだが、江戸期に成立した煎茶を用いる煎茶道も含む。

豊臣秀吉は、平三畳の随所に黄金が施された「黄金の茶」を、千利休監修の元に造らせたといわれている。

取材／記事　：　新教育産業監修・月刊私塾界記者　千葉誠一

■　ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。
できるだけ対応したいと思っています。　ご連絡はこちらまで：magazine@chuoh-kyouiku.co.jp